

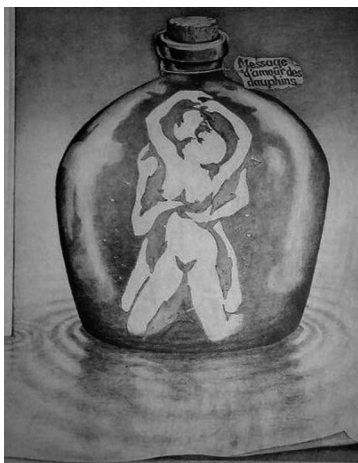
本章のねらい

複雑な国際関係を理解するにはどのようにしたらよいのであろうか。日々、新聞やテレビでは、国際的出来事が報道されている。それらを寄せ集めただけでは、国際関係の見取り図を描くことは困難であろう。国際関係論の場合、自然科学におけるような厳密な理論はない。しかし、国際関係の理解に資する国際関係の見方は存在する。第二次世界大戦前は、ユートピアニズムがあり、その批判として、リアリズムが起った。戦後は、古典的リアリズム、ネオリアリズム、ネオリベラリズム、コンストラクティヴィズムといった多様な理論が生まれた。これら主流の国際関係理論から、国際関係論とは何かに迫りたい。

1 国際関係における理論

A 世界をどのように見ているのか

下の絵を見たことはないだろうか（図8-1）。上にコルクの栓がついていて、おそらく、ワインでも入れる容器のように見えないだろうか。その容器の表面になにやら描かれている。男性が後ろから女性を抱きしめている



出典：Sandro Del Prete, "Message of Love from the Dolphines"

図8-1 イルカからの愛のメッセージ

妖艶な絵柄にも見える。ところが、これを子供に見せると、イルカが何頭もいる絵に見えるという。下向きのイルカが5頭、真ん中に横向きが1頭、そして、上部には、上向きのイルカが2頭、その間に小さなイルカが見えると思う。

同じ絵でも、子供にはイルカが何頭もいると見え、大人には男女が抱き合う絵に見えるのはなぜだろうか。絵の捉え方が異なるのは、経験というフィルターを通し、絵を見ているところが大きいのだろう。

これを国際関係に置き換えると、世界には70億以上の人々が暮らし、また、国家といわれるものも200ほど存在する。それらの国々の間で、人の交流、モノ・カネの往来、情報のやりとりが行われ、時には、紛争が生じ、戦争へと発展することもある。こうした複雑な世界をわれわれはどのようにしたら理解できるのであろうか。

B 理論はなぜ必要か

理論というと、おそらく、自然科学における厳密なものを思い浮かべるだろう。例えば、ニュートンのリンゴの話は、誰もが知っている。ニュートンの万有引力の法則が、理論として優れていたのは、リンゴが地面に向

かって落ちるという力（正確に言うと、リングと地球がそれぞれに引き合う力）が、月と地球、あるいは、地球と太陽との間でも同じように作用し、宇宙全体がこの法則に導かれていることを示した点だ。リングと地球とでは、質量が全く異なるので、結局、リングが地面に落ちるように見えるだけだ。

万有引力の法則のように、宇宙のすべての物体に適用できる理論が、国際関係の世界にも存在しうるのだろうか。おそらくそのような理論はない。国際関係で「理論」と呼んでいるものは、国際政治を捉える1つの見方であり、それはモデルといってもよいかもしれない。ただ、飛行機のプラモデルとはいささか異なる。飛行機の場合、実際の飛行機があり、それを縮小したのがプラモデルだ。これに対し、国際関係では、もともとその姿がどのようなものか、明確に見えているわけではない。複雑な国際関係から何かを中心に構成した1つのモデルが理論といってもよい。理論は、国際関係論が何を目指した学問として始まったのか、に関連する。

C 国際関係論のはじまり

国際関係論あるいは国際政治学の誕生は、他の社会科学の分野に比べると新しい。政治学は、古代ギリシャの昔からあった。同じ社会科学系でも、経済学は18世紀、社会学は19世紀に誕生した。

国際関係論の始まりは、第一次世界大戦を契機とする。もちろん、当時、第一次世界大戦は、たんに「大戦」と呼ばれていた。この大戦によって、戦闘員・民間人あわせて、およそ2000万人もが犠牲になったといわれている。その時点で、人類史上、最大の犠牲者を出した戦争といえる。

したがって、このような戦争をどのようにしたら避けることができるのか、その方法を探るきわめて理想主義的、あるいはユートピア的なものとして、国際関係論は誕生したといえる。また、このときの国際政治思潮をリベラリズムと呼ぶ場合もある。このリベラリズムは、多元的な概念であり、後に、国際関係理論におけるリベラリズムを論ずるので、ここで、リベラリズムとは何かを明らかにしておく。

リベラリズムとは、もともと啓蒙思想の1つである。人間は理性を有し、それを発揮することにより、既存の権威や体制から自らの将来を自由に決める決定権を有するとの考えである。つまり、人間はその理性を活用し、

よりよい未来を切り開くことができるというのだ。その意味で、人間の進歩によって、世界は改良可能だという理想主義である。

それでは、第一次世界大戦後の国際関係の世界は、何を理想としたのか。当然、世界大戦という惨禍が二度と起きないようにすることであった。よりどころとなったのが、第一次世界大戦を勝利に導いたアメリカの大統領ウィルソン（Wilson, Woodrow）が唱えた「十四か条の平和原則」である。そのなかに、国際平和機構の設立がある。これを下敷きに、集団安全保障の理念の下、国際連盟が設立された。

しかしながら、現実の国際関係は、ウィルソンが描いた理想とはほど遠いものであった。イギリスやフランスは、敗戦国ドイツに過酷な賠償を課し、民族自決は限定的であった。国際連盟は設立されたものの、提唱国のアメリカでは、上院がベルサイユ条約を批准せず、アメリカは国際連盟に参加しなかった。1930年代に入ると、日本、ドイツ、イタリアが国際連盟から相次いで脱退し、国際連盟は本来の機能を発揮することなく、世界は第二次世界大戦へと突入していった。

2 リアリズム

A 古典的リアリズム

1939年に刊行されたカー（Carr, Edward Hallett）の『危機の二十年』は、ユートピアニズムからリアリズムへの橋渡しをする重要な著作である。このなかで、カーは、ユートピアンとは、「意志の働きによってリアリティをユートピアに変えることができると信じている」者と捉えている。ほぼ第二次世界大戦が始まったと同時期に出版されたこの本は、ユートピアとリアリティのバランスをとる必要性をうたっているが、リアリティを重視すべき時代を迎えていることを示唆した。

アメリカにおけるリアリズムを、1つの科学として完成させたのが、ドイツから亡命した国際政治学者モーゲンソー（Morgenthau, Hans J.）である。モーゲンソーは、1946年に、いまや国際政治学の古典ともいえるべき『国際

政治』を著した。モーゲンソーを古典的リアリズムと位置づけるのは、ネオリアリズムという「ネオ」(新しい)を冠したリアリズムと区別するためである。

モーゲンソーは国際政治学を科学たらしめようとしたが、その所以は、「政治は一般の社会と同様、人間性にその根源をもつ客観的法則に支配されている」と認識していたからだ。モーゲンソーは、人間性についてストレートに論じているわけではないが、「国際政治とは、他のあらゆる政治と同様に、権力闘争」であると位置づけた。人間性の本質とは、権力欲にあり、国際政治もそれに変わりないというのだ。

個人の権力欲を国家に置き換えたのが、国際政治を理解するうえで道しるべとなる「力(パワー)によって定義される利益(インタレスト)の概念」だ。これはいささか分かりにくいだが、国家は他の崇高な理念(平和主義・人道主義等)に基づき行動しているように見えても、実は、パワーそのものを追求していることを表現している。

それでは、権力闘争とは、どのような形であられるのであろうか。モーゲンソーは3つのパターンを挙げている。力を維持するか、力を増大するか、あるいは、力を誇示するかである。それぞれ、現状維持政策、帝国主義政策、威信政策に対応する。このうち、帝国主義とは、現状の打破、つまり、現にある国家間の力関係を逆転させることをいう。

国際政治が権力闘争の場であるならば、例えば、現状維持政策をとる国家と、帝国主義政策をとる国家では、利益が相反し、いずれ戦争へと突入する。第二次世界大戦が、アメリカ、イギリス、フランスといった現状維持国家と、日本、ドイツ、イタリアといった現状の打破を求めた国家との戦争であったようにだ。

国家間の権力闘争を抑制する装置(平和の実現)として、モーゲンソーは2つを挙げている。1つは、バランス・オブ・パワーであり、もう1つは、国際法、国際道義、世界世論といった規範的制約である。ただ、興味深いのは、リアリストとしてのモーゲンソーが規範的制約に懐疑的であるだけでなく、バランス・オブ・パワーにも信頼を置いていない点だ。その理由は、バランス・オブ・パワーの不確実性(力の算定があいまい)・非現実性(適用できない)・不十分性(道義的要素も重要なのではないか)にあるという。

B ネオリアリズム

モーゲンソーが、人間性の本質を基礎に、国際関係理論を展開したのに対し、1960年代から70年代にかけ、科学の装いをさらにこらしたネオリアリズムが登場する。その提唱者は、国際関係理論界のスーパースターといえるウォルツ（Waltz, Kenneth N.）である。

ウォルツは、戦争に関し、3つのイメージと呼ばれる原因を分析した。第1イメージとは、人間の本性と行動が、戦争をもたらす原因であるという。第2イメージとは、国内条件によって対外行動（戦争）が決定される。国家を改造すれば、戦争を減らし、永久に根絶できるとの考えだ。第3イメージは、人間や国家に対する洞察から戦争の原因を探るのではなく、国家が戦争を行わざるをえなくなる状況そのものを分析の対象とした。

ウォルツは、第1・第2イメージによる戦争の理解は、還元主義であるとして、きびしく批判した。還元主義とは、部分の要素の分析から、全体の原因を探る方法論である。部分の要素とは、国家の指導者は誰か、その指導者はどのような特性を有しているのか、民主主義国家か独裁主義国家かなどを意味する。

国家の指導者が変わっても、国家のあり方が違って、やはり戦争は繰り返し起きているのではないか。そこで、ウォルツは、国家が戦争を行う状況そのものを分析の対象としたのである。このように、還元主義から体系的アプローチへと、戦争を分析する方法論の大転換を行った。

ウォルツは、戦争をもたらす体系を国際構造と呼んだ。したがって、ウォルツの国際関係理論は、構造的リアリズム、あるいは、古典的と対比し、ネオリアリズムと呼ばれる。ウォルツは、その構造を3つの点から定義する。①システムを秩序づける原理、②差別化されたユニットの機能の特定化、③ユニット間の能力の分布である。これらは、国内政治と国際政治の比較から論じられている。

このなかで、最も重要なのが、秩序原理である。これは、システム内におけるユニットがどのように組み立てられているかに関連する。比喩的ではあるが、国内政治の場合、政府を頂点に、各ユニットは秩序立てられており（ハイラーキー）、それぞれが異なる機能を果たし、一体となっている。国際システムの場合には、国内政治のような意味での政府は存在せず、ア

ナーキーな世界ということになる。そのなかで、国家は、最低限、生き残りを確実にするため自助を基本的な行動原則とする。また、国家はそれぞれ同じ機能を果たすため、類似したユニットとなる。

ウォルツによれば、国家の能力それ自体は、国家の属性であるが、それがどのように分布されているかは構造の定義に含まれるという。また、ウォルツが目じたのは、すべての国の能力の配置ではなく、大国間の配置である。第二次世界大戦前は多極、その後の冷戦の時代は二極構造となる。国際政治の秩序原理であるアナーキーに変化がなければ、この能力の分布の変化こそが、国際構造変動の唯一の要因となる。

ウォルツ理論の真髄は、アナーキーと自助によって特徴づけられた国際システムを前提に、国家は互いに均衡を保つ行動をとることを明らかにした点にある。アナーキーによって、国家間の協力が制約を受け、勢力均衡が繰り返して形成される。これにより、国際システムはかなり安定する。ウォルツ理論の場合、戦争が起きる可能性はきわめて低い。

C 攻撃的リアリズム

ウォルツの国際関係理論は静的である。静的とは、ウォルツ理論では、戦争が起こる場合がほとんど想定されないからだ。とりわけ、二極体系が最も安定していると論じ、それぞれの極が、生き残りを望むということだけを前提にすれば、二極の安定的な世界をこわそうとは互いに思わないだろう。この点、もう1人の重要なネオリアリストであるミアシャイマー(Mearsheimer, John J.)は、ウォルツのネオリアリズムを防御的リアリズムと名づけ、自らのそれを攻撃的リアリズムと称した。

ウォルツとミアシャイマーは、ネオリアリズムの基本的前提を共有しているが、その違いは、国家が最終的に何を望んでいると措定しているかにある。ウォルツは、「生き残り」といういささか慎ましい願望を前提としていたのに対し、ミアシャイマーは、国家の最終目標は、「世界覇権国」(the hegemon)になることだと論じた。つまり、「国際システムの中で唯一の大国になる」ことであり、いわば一極支配の世界である。それが、自国の生き残りにとって最上だからだという。

ただ、第二次世界大戦後、アメリカといえども、世界覇権国になったの

ではなく、南北アメリカを支配する地域覇権国に過ぎないというのがミアシャイマーの理解だ。

防衛的リアリズムと攻撃的リアリズムの違いは、他国への恐怖の存否にある。恐怖という要素を取り入れることによって、ミアシャイマーは、国家がどのように行動するのか、よりの確に判断できると考えたのである。こうした違いが生じるのは、冷戦という二極システムは不変であるとの前提でウォルツが理論構築していたのに対し、ミアシャイマーは、冷戦後の世界を見据えていたからだ。攻撃的リアリズムを体系化したミアシャイマーの『大国政治の悲劇』は、2001年に出版された。2014年には、新たに「中国は平和的に台頭できるか？」という刺激的な1章を追加し、改訂版が出されている。

同書は、地域覇権国（アメリカ）、潜在的な地域覇権国（中国）、それに、日本を含む関連諸国の外交政策を考えるうえで示唆に富むところが多い。ミアシャイマーは、中国が地域覇権国となるのを阻止するのは困難だと考えている。日本は、中国の脅威にバランスをとろうとするのか（アメリカとともに）、それとも、バンドワゴンニング（追従政策）をとるのか、日本の今後の外交政策を考えるうえにおいても重要な視点だ。

コラム 科学と理論

本章に登場するウォルツ（1924-2013）は、『国際政治の理論』において、理論構築の方法として、還元主義的理論と体系的理論について詳細に論じている。この還元主義的理論とは、要素還元主義ともいわれるように、要素の分析を通し、全体を理解しようとする方法である。科学の代表的方法である帰納と演繹の違いに対応するといってもよいかもしれない。

ウォルツは、体系的理論の構築を目指した。着目したのは、第一次世界大戦や第二次世界大戦という個々の戦争ではない。国家の指導者が変わり、政治体制が変わっても、なぜ戦争が起きるのかを明らかにする理論を提示しようとした。

まだ抽象的な説明かもしれない。視点を変えてみよう。フランスの数学者ポアンカレ（1854-1912）は、「学者は秩序をつけるべきである。人が事実

を用いて科学を作るのは、石を用いて家を造るようなものである。事実の集積が科学でないことは、石の集積が家でないのと同様である。」と述べている。

これと対比するならば、ウォルツは、国際関係において秩序をつけようとしたのである。それが理論だ。ただ、家が石や木でできているのは明らかだが、国際関係は、そもそも何からできているかを突き止めることすら難しい。そこに、理論のヴァリエーションが生まれる要因がある。国際関係の世界は何からできているのであろうか。物質か観念か。突拍子もないことかもしれないが、ぜひ考えてみよう。

● 理解を深めるための書物

- ポアンカレ/河野伊三郎訳『科学と仮説』岩波文庫, 1959.

3 ● ネオリベラリズム

A リベラルの意味

リアリズムを象徴する言葉に、安全保障のジレンマがある。アナーキーの世界では、各国は自国の安全をなるべく高めようとする。その方法は、自国の軍事力の増強であり、他国との同盟の形成である。ただ、隣国にとってこれはどのように映るのだろうか。おそらく、自国の安全にとって脅威の増大と捉えるだろう。そこで、対策として、同じように、軍事力の増強や同盟の形成へと走ることになる。それが、また、相手国にとっては不安の材料となり、さらに軍事力の増強をはかる。こうして、軍拡競争が延々と繰り返される状況を表現したのが、安全保障のジレンマだ。自国の安全をできるだけ確保したいのに、結果的には安全がますます脅かされるという皮肉な状況を指す。

国家は、存立という点では、そうとうに疑い深いものようだ。そうなると、リアリストが描く国際関係では、疑心暗鬼がうずまき、とても国家

間の協力など考えられない。しかし、国際関係の世界は、果たしてそのようにぎすぎすして、国家間の協力が全く得られないものなのだろうか。たとえリアリズムの前提をすべて受けいれても、国家間の協力が成り立つ場面もあるのではないかという問題を提起したのが、ネオリベラリストたちであった。

リアリズムは、比較的均一な能力を有する大国間の関係において、パワーの重要性を示した。しかし、通常、パワーの源泉と考えられる軍事力に、大きな差異があっても、相互依存関係にある国家間では、リアリストが見過ごしているパワーが作用しているのではないか。それを理論化したのが相互依存論である。

もう一度、カーの『危機の二十年』を振り返ってみたい。カーは、ユートピアンの特徴の1つに、「利益の調和」を挙げていた。これは、国家の利益の追求は、人類全体の利益の極大化にあるとの考えだ。また、平和こそが各国共通の最大の利益であることを前提としていた。自国にとっての利益は、他国の損失ではなく、分野によっては、国家は共通の利益を追求できるのではないかとユートピアンは考えた。まさに、このような考えが、国際レジーム論として復活することとなる。

B 相互依存論

1977年に出版されたコヘイン(Keohane, Robert)とナイ(Nye, Joseph)の『パワーと相互依存』は、国際関係に新たな見方を登場させた。ただし、コヘインとナイは、リアリズムの前提に異を唱えたわけではない。リアリズムが見過ごしている点、あるいは、当時、重要になってきた経済や環境といった問題を取り入れた理論を提示したのである。

当時の国際関係における新たな変化として、アメリカの覇権にかげりが見えてきたことが挙げられる。軍事的には、ベトナム戦争の泥沼から抜け出せず、経済的には、1971年8月、ニクソン大統領が、ドルの金兌換停止を発表したことに象徴される。さらに、1970年代は、米ソデタントの時代といわれ、国際関係の緊張がゆるんだ。

このような時代背景のもと、コヘインとナイは、「非対称的な相互依存関係がパワーの源泉となりうる」のではないかという新たな理論を提示した。